

## ホワイトヘッドの『シンボリズム』（上）

細 井 雄 介

### 序

筆者は昨年四月本大学哲学科に移り、美学美術史コースの新設にあたって美学を担当することになった。私はこれまで演劇を研究対象にえらび、演劇学を専攻領域とする者であったが、幸いここで新たに研究室を与えられた機会に、本大学における今後数年間の課題を英国経験論に展開された感性論の研究と定めてみた。

「われわれは感性に触発された理性の時代に生きている」という著名な言葉を吐いたのは観念論哲学の大成者ヘーゲルであった。ところで「美学」(Ästhetik, aesthetics, esthétique)が“aesthetica”の名称のもとに一箇の学、すなわち「感性的認識の学」として成立したのはようやく一七五〇年、ドイツの哲学者バウムガルテンの著書“*Aesthetica*”(I. 1750, II. 1758)においてである。だが、ひとたび近代の学として成立するや、カント、シラー、シェリング、ヘーゲルなど踵を接して連なり合う思想家は、この学のもとに、美および芸術に関する主要な考察を精力的に遂行し、ここに確立した諸体系は今日なお大きな支配力をもち、研究者は容易にそれらの束縛を断ち切れない状態にあると言つて過言ではない。もとより美および芸術をめぐる思索は古くからあり、古代のプラトン、アリストテレスその他の哲

学を仰ぎ見ないわけにはゆかない。それにしてもなお、一箇の体系学としての美学の形式・内容を整備したのは近代の努力である。それでは十八世紀後半のきわめて短いあいだにこのように豊穡な稔りを得た「美学」を準備した背景には何があったのか。

「人間が感性のまどろみから醒めて人間であることを自覚し、あたりを見まわすと、おのれが国家のなかにいることを見出す。」この忘れたい言葉はシラーの有名な論文、いわゆる『美的教育論』の冒頭にみられるものである。

この論文執筆の時期一七九五年はフランス革命の実相が陰惨な混迷の度を深めていた頃で、シラーは後進国ドイツからこれを眺めていた。そしてかれは、政治的課題解決のために美的問題を論じはじめた。人間を人間たらしめるものは自由であり、自由にいたる道は美であると考えたからであった。シラーの芸術論は、引用の言葉にみるように、感性的存在としての人間と国家との緊張関係を前提に展開されるのである。野蛮な国家組織の圧力のもとで気高い人物をつくるのはなにか。芸術である、とシラーは答える。なぜなら芸術は一切の政治的腐敗のさなかでも純粹であり、芸術は因襲の一切から解放されてあるから。政治権力者は芸術の領域を遮絶することはできようが、ここで支配することはできぬ。芸術家を卑めることはできようとも、芸術を変造することはできない。このような芸術にはじめて気高い性格を育成することができるのである。

いましばらくシラーの説くところを聞くことにしよう。シラーもまた人間を感性的にして理性的な存在とみる。そしてこの感性および理性をつき動かすものとして、かれは人間の内部にそれぞれ対立し合う二衝動を想定した。一つは「素材衝動」（感性衝動）であり、人間性の素質をよびさませてこれを発展させるものであるが、官能とつよく結びついている。他は「形式衝動」であり、これはわれわれの外にある諸々の事物に必然的な法則を与えてこれらを秩序づけてゆく。人間をつき動かす根源的な衝動はこの二つしかなく、第三の衝動はもはやない。さて、人間において素

材衝動が支配的であると、感覚が人を溺れさせて世界は客体であることをやめてしまう。また形式衝動が支配的であると、思考ばかりが先走って感受性がすてられ、ひとりの人が独自の主体であることをやめてしまう。それゆえ二つの衝動はそれぞれ制限をうけてエネルギーとしては緩和されねばならない。こうして人格を感受の圧力から守り、感性の自由を思考の干渉から防ぐのが文化の使命であらうが、その文化は人間内部のどこにおのれの基盤をおくのか。

ここでシラーの注目したのが、二衝動の交錯する作用であった。両者の交錯する領域のなかでは二つの根源的衝動は協働し合うのであり、この交錯領域をかりに独立のものとなすとするれば、これに対して他の二衝動の領域はいずれも対立しているかの感が生ずる。それゆえシラーは「二衝動の交錯領域に新しく一つの衝動を見立てて、これを「遊戯衝動」と名づけた。そしてこの遊戯衝動に根ざす遊戯こそは人間の二重の天性(感性・理性)を同時に展開させるものであり、人間は真に人間であるところにあつてのみ遊戯し、また逆に、ただ遊戯するところにおいてのみ全き人間であるとみたのであつた。

だが、感性と理性の調和を試みるシラーの言説はここに尽きていたのではない。『美的教育論』の末尾でシラーはふたたび国家の問題に戻り、国家の形態を理論上三つに分類し、力動的國家において人はそれぞれ権利を主張し合う力として対立、倫理的國家ではそれぞれが義務・法律を以て対処、美的國家においてのみ人はそれぞれ自由な遊戯に生きる自由人として対峙する、と言う。素材衝動に支配される力動的國家、形式衝動に支配される倫理的國家という理念にそれぞれ先人ホッパスおよびカントの思想が顧慮されていることは容易に認められるであらう。

思えばホッパスの『リヴァイアサン』の著されたのは一六五一年、パウムガルテンの『美学』樹立の百年前であつた。國家の本質を究明するこの書物はまず人間の考察にはじまっているが、そのさい人間をひたすら感性的存在として把握し、この人間把握の基調は最後まで保持されてゆく。そしてこの点が近代をひらいた特質の一つとひろくみな

されている。その後四十年、啓蒙思想の祖と呼ばれるロックの『人間知性論』は一六九〇年公刊であるが、ここでも人間の特質を論究してゆくにあたり、感性的存在としての人間を起点とすることでホッブスと軌を一にする。つづくパークリは勿論のことである。ひるがえってホッブスよりさらに五十年さかのぼれば、一六〇〇—一〇一年は『ハムレット』の書かれたと推定され、シェイクスピアのいわゆる悲劇時代がはじまった年である。マローウ、シェイクスピアなど多くの卓れた詩人たちが特有の劇場に展開したエリザベス朝演劇は、演劇史上、古代ギリシアに匹敵しうるただひとつの黄金世紀を築いたのであった。劇は生身の人物を登場させる。かれら劇詩人の舞台上に活躍したのは、はげしい権力闘争の渦中に身を投じ、あるいは勝利の歓喜を謳い上げ、あるいは敗北の絶望に沈吟する感性ゆたかな英雄たち、および周囲に群り集う生氣発刺の人々であった。こうした人々の躍動する姿やそのなから生れてた人間観を論じて、政治思想史は、近代主権国家の成立が感性に新たな照明を浴せたと説いている。<sup>(1)</sup>とすれば、先にみたシラ

ーの所論もまさしく近代史のはげしい政治的緊張を背景に感性と理性の調和をはかった典型的な所産である、とみてもよいであろう。

「美学」はその成立を宣言したのは、ひたすら美とりわけ芸術美に関する一般原理学としての特質を露わにし、美的価値をめぐる純粹認識の立場を強調してきた。美学は芸術を論ずる静観性<sup>(2)</sup>のつよい学というのが今日の一般の印象であろう。けれども、上述のように近代美学成立の前史を瞥見し、また確立期のシラーの言説などを思い浮べると、前記のヘーゲルの言葉はいまなお美学の使命に反省を強いる深い意義を湛えていると感じられるのである。すなわち、美学は美的価値論を主軸とするだけではなく、むしろそれ以上に感性論をこそ重視せねばならないのではないかと、すくなくとも現在の私には、近代史の社会的動向に於て勃興したといわれる感性論の系譜を無視することはできなくなっている。そしてその主要な系譜をホッブスにはじまりロック、パークリ、ヒュームと連なる英国経験

論の流れのうちに見定めている。バウムガルテンをついでカントは二大批判のうち『判断力批判』（一七九〇年）を著わし、これがその後の美学発展の確固たる礎石となった。この画期を念頭におきつつ、私は英国経験論における感性論の展開を、従来とくにわが国では考究の観点として採られることのすくなかった美学の見地から理解してゆきたいと考え、一応、今後数年間の課題として掲げてみた次第である。

さて、昨年四月から私の担った責務のひとつに「美学原典講読」の時間があつた。これから美学に関わりを持つとする学生とともに週一回基礎文献を討究してゆく時間である。その第一年度の原典として、私はおのれに定めた如上の課題を考慮しながら、ホワイトヘッド (Alfred North Whitehead, 1861-1947) の一講演『シンボリズム』(Symbolism - its meaning and effect, 1927) を採りあげたのであつた。採用の理由はおおよそつぎのとおりである。

今日、芸術哲学の領野でもっとも活発な発言を行っている一人にアメリカのランガー女史 (Susanne K. Langer, 1895-) がいる。かの女は文芸以外の芸術、音楽や造形美術にみられる芸術表現の美的意味を言語表現と類比的に研究し、芸術は一般に感覚的存在をもった「象徴」であつて、音・色・線などの感覚素材を複合的に組みあわせた分節的形態をなすものであり、その構成を通して感情的意味を表現する、という独自の芸術意味論を展開した。このランガーの思想形成にもっとも強い直接の影響を与えたのは、かの女の自認するとおり、カッシーにほかならないが、なお一人ホワイトヘッドの思想も無視できないと思われる。事実ランガーの第一の名著 "Philosophy in a New Key" (1942) は「偉大な師友」としてのホワイトヘッドに捧げられているのである。美学に携わる者としてランガーの発言を看過しえないことを思えば、その先駆思想のひとつを検討してみるのは無意義でないこととみたこと、これが第一の理由である。

ついでホワイトヘッドとロックとの関連に心惹かれた。本書の序にはつぎの明言が置かれてゐる。“These lectures will be best understood by reference to some portions of Locke’s *Essay Concerning Human Understanding*.” ラッセル、ホワイトヘッド共著の“*Principia Mathematica*”, Vol. 1. (1910) は論理学史上の一事件であり、その後ウィーンから来住のヴェイトゲンシュタインを俟って華々しく展開されたケンブリッジの哲学者たち、分析学派の業績は現代哲学の偉観であった。ところでこゝで躍動する哲学精神を眺めるとき、われわれは観念論の圧倒的な支配の時期をもった大陸の思想風土とは異なるものを感じ、問題設定の多くに、ロックやヒュームなどの根つよい伝統を反省させられるのである。同様の事態が私の採りあげたこの小冊子でも生じている。とすれば、これを手懸りとして、ロックを新たに把えるべきいくつかの視点を見出すことができるのではないか。このような期待が第二の理由である。

第三にはホワイトヘッドの中心思想そのものへ向う私の関心がある。私は今までのところホワイトヘッドについてはほとんど知らない。だが、つぎのようなかれの言葉だけはすでに永く私の心に留まっていた。「事物の本性の核心にはつねに若さの夢と、稔りとしての悲劇とがある。森羅万象の出来事はこの夢にはじまって、のちに悲劇の美を刈り入れる。」(At the heart of the nature of things, there are always the dream of youth and the harvest of tragedy. The Adventure of the Universe starts with the dream and reaps tragic Beauty.) 一九五六年に著されたヘンの『悲劇とつら稔り』(T.R. Henn, *The Harvest of Tragedy*) は硬直した図式から一方的な独断を下すようなことを注意ぶかく避け、悲劇の多様な諸現象のそれぞれに柔軟で精緻な観察を加えている論著で、演劇学を専攻し悲劇に最大の関心を抱く私にとっては、もつとも示唆に富む悲劇論の一つとなっている。この書物の標題がまさに引用の文から選ばれたものであり、ヘンはホワイトヘッドに悲劇は受苦を通じてこの宇宙との至高の調和感を伝え送るものとみる思想を読みとって、この思想に深く共鳴しているのである。ホワイトヘッド自身の哲学思想発展の過程で小冊子ながら

きわめて重要な著作とみなされている『シンボリズム』の読解が、やがて難解晦渋といわれるかれの中心思想への接近を導いてくれることになれば幸いである、と私は考えたのであった。

全八十八頁のこの小冊子は一年間二十余回で扱うに量的には適當であり、まもなく読み了えようとしているが、その内容は討議に参加した学生諸君の多くには難解であったように思われる。邦訳にはすでに市井三郎氏による『象徴作用——その意味と機能——』があり、大いに参照させていただいたが、内容理解を深めさせてくれたのは勿論原典に即しての討議であった。とくに特別参加の瀬戸井厚子副手の熱心な発言はその都度熟考を強いるものであり、毎時間の緊張を高めてくれた。記して感謝の意を表しておきたい。一年の成果をまとめるにあたり、私はあえてつぎのように新たな翻訳を行い、必要と考えられるところに注解を試みてゆくことにした。この作業を終えたのち、最後に、本書に展開されたホワイトヘッドの思想に対する私の理解を述べることにする。

（一九七二年二月上旬）

註

- (1) 福田欽一『近代の政治思想』岩波書店（昭和四十五年）、『近代政治原理成立史序説』岩波書店（昭和四十六年）参照。  
(2) 河出書房版、世界大思想全集 哲学・文芸17 『ホワイトヘッド』所収（昭和三十年）。

この行方翻訳の底本は一九五八年の Cambridge Univ. Press 版、First Edition 1927, Reprinted by offset, 1958 年版  
 によってある。短文の Dedication と Preface とは省く。

訳文は「」によってかこみ、若干の箇所では文意を鮮明にするために「」を用いて訳者の解釈を補った。  
 目次は左の通りの原文の字を掲げておく。

## CONTENTS

### CHAPTER I

1. Kinds of Symbolism
2. Symbolism and Perception
3. On Methodology
4. Fallibility and Symbolism
5. Definition of Symbolism
6. Experience as Activity
7. Language
8. Presentational Immediacy
9. Perceptive Experience
10. Symbolic Reference in Perceptive Experience
11. Mental and Physical
12. Roles of Sense-Data and Space in Presentational Immediacy
13. Objectification

### CHAPTER II

1. Hume on Causal Efficacy
2. Kant and Causal Efficacy
3. Direct Perception of Causal Efficacy
4. Primitiveness of Causal Efficacy
5. The Intersection of the Modes of Perception
6. Localization
7. The Contrast Between Accurate Definition and Importance
8. Conclusion

### CHAPTER III

- Uses of Symbolism



## 『シンボリズム——その意味と作用』

## 第一章

## 「一、シンボリズムの種類

文明のさまざまな時期を瞥見しただけでも、シンボリズムに対する態度にはそれぞれ大きな差異のあることがわかる。例えばヨーロッパ中世にはシンボリズムが人々の想像力を支配していたようであった。建築は象徴的であった。儀式は象徴的であった。紋章も象徴的であった。だが宗教改革とともに反動がはじまって、人々は諸々のシンボルを用もなく案出された他愛なきものとみてこれを斥けようと努め、他方、究極の事物を直接把握することに専念した。

けれどもこの種のシンボリズムは人生の外辺にあるもので、その構成には非本質的要素もふくまれている。ある時期には追いつめられながら別の時期には見捨てられるという事実が、すでに、この種の皮相な性質を証明する。

シンボリズムにはより深い種類、すなわちある意味で人為的でありながら、しかも生活に不可欠のものがある。言語は、書かれるにせよ話されるにせよ、この種のシンボリズムの一つである。ある一語の発声音、あるいは紙に記されるその字形などは重要でない。語はひとつのシンボルであり、語の意味はこの語が聴く人の心にひき起す諸々の觀念・心象・感情によって構成されている。

もう一つ別種の言語がある。これは純然たる書かれた言語であって、代数学の数学的記号シンボルから成っている。いくつかの点でこの種のシンボルは通常言語のシンボルと異なっている。代数学のシンボル操作は、代数学の規則に従うかぎり、われわれの推論を代行してくれるのであるが、このようなことは通常言語では起らない。通常言語では言語の

意味を見失うことはできないし、ただ文章のシンタクスだけに頼るわけにはゆかないのである。だがいずれにせよ、言語と代数学とは中世ヨーロッパの寺院が示しているものよりは根源的な種類のシンボリズムを例示していると思われる。」

「象徴」という語は、わが国では、*analogie* (接合する) に由来して本来割符を意味したギリシア語 *analogos* を源とする欧米語 *symbol* の訳語として用いられている。この欧米語そのものが多義的であるが、訳語「象徴」の使用はさらに混乱をきわめている。一般的には感覚的形象がその本来の意味に加えて非本来的な意味内容を表わす場合に、これを象徴と呼んでいるが、訳語「象徴」には象徴作用の契機が混入されやすい。今日「象徴」のほかに「シンボル」の語が多用されて次第に定着化の傾向をみせているのも、そのことを理由の一つにすると思われる。このような事情を勘案して、本訳稿では感覚的形象としての *symbol* がまぎれなく把握されねばならぬ箇所では「シンボル」の訳語を用いることにする。

さて、本書の書名であり論題であるところの *symbolism* の語でホワイトヘッドが何を指すのかはここではまだ不明である。「象徴の体系」であるのか、「象徴主義」か、「象徴的作用」か、「象徴行動」であるのか。実をいえば、これの陳述のすべてを読了してもなお、この *symbolism* には解釈の余地が大きく残ると私は思う。それゆえ本訳稿では *symbolism* の語は原則として「シンボリズム」におきかえるに留めておき、これをどのように理解するかは結論で述べることにする。

## 「一、シンボリズムと知覚

上記の種類よりもさらに根源的なシンボリズムがなお存在する。われわれは眼前の彩られた形体を眺めて、<sup>11</sup>椅子がある<sup>12</sup>などと言う。だがわれわれの眺めていたものは色をもった形にすぎないのである。この場合、芸術家であれば椅子という觀念に飛躍せず、美しい色、美しい形に目を凝らしたこともあろう。芸術家でないわれわれは、ことに疲れていたりすれば、色をもった形を知覚してただちに椅子とみなし、これを使うか、あるいはこれについて感情や思考をかきたてるかという具合に受けとめるのがつねである。この飛躍を一連の難しい論理的推論を用いて説明することはたやすい。それによれば、われわれは種々の形・色について予め貯えてある經驗に照して、いま眼前には椅子があるという蓋然的結論をひきだす、とされることであらう。ところで、この色をもつ形から椅子へいたるには高度の心性が要るとみられていることに私は疑念をいだいている。その理由の一つは、私の友人で椅子を度外視して色・形・位置そのものを凝視することのできた芸術家が、その能力を身につけるまでには大変な苦勞を重ね、きわめて高度の訓練を経てきた人であったことにある。われわれは上述のいり組んだ推論をさしひかえるのに念入りな訓練を必要とはしない。推論の断念はいともたやすいのだ。理由のもう一つはつぎのことにある。あの芸術家に加えて子犬一匹がいたとすれば、子犬は椅子があるとの想定に基づいてただちに動き、椅子として使おうとその上に跳びのつたでもあろう。もしそうしなかったとすれば、それはよくしつけられた犬だったからだ。それゆえ色をもった形から、色とは関りをもたぬ一切の目的には利用しうる客体、という觀念へと移るのはきわめて自然な移行であって、むしろ、われわれ——人や子犬ども——がその客体へ働きかけまいとすることこそ細心の訓練を要するのである。

このようにみると、色をもった形はわれわれの經驗内の何らか他の諸要素のシンボルであると思われる。そして色をもつその形を見ると、われわれはおのれの行動をそれら他の諸要素に向って調節している。このようにわれわれの諸感覚から、象徴化されている諸物体へ、と向うシンボリズムにはしばしば誤謬が生ずる。例えば、光と鏡を巧みに扱

えば人を全く欺くこともできるので、この場合、欺かれまいとするには努力も必要とならう。sense-presentation（感覺の現前）から物理的物体へと向うシンボリズムは象徴のあらゆる様態のなかでもっとも自然で広範囲にわたっているものである。このシンボリズムは単なる趨向性、機械的な方向転換ではない。なぜなら人でも子犬でも、椅子を見ながらこれを無視することはよくあるからだ。また光の方へ向きを変えるチューリップは、おそらく極微量の sense-presentation はもつのであろう。今後私はつぎのような仮定に基づいて議論を進めてゆきたいと思っている。すなわち、sense-perception（感覺知覚）は主として高度に進展した組成体（organism）の特性であるが、しかし組成体のすべては causal efficacy という経験をもち、これら組成体の営みがそれらのおかれている環境によって条件づけられるのはこの経験による、と仮定するのである。」

ホワイトヘッドは第一節で深淺の度合を具えた多様なシンボリズムの遍在を確認したのち、この節でもっとも根源的なシンボリズムを指摘した。前者群と後者の相違はなにか。それは前者群が客体的な現象として外界に存在するのに対し、後者は知覚する主体の内部作用であることにある。

ある色や形を知覚してこれを椅子であると認知する場合、椅子という客体に変化した色・形は知覚主体の経験の諸要素が托されたシンボルとなっている、とホワイトヘッドは言うのであり、この知覚主体の作用を根源的なシンボリズムと呼ぶのである。したがってこれを主題に展開されようとする今後の議論は当然認識論の領野に入ることとなるであろう。そしてかれは認識の基本構造にシンボリズムを認める者である。

sense-presentation, sense-perception の二語は原語を記してゆこう。両者は各々感覺器官が呈示する作用、知覚する作用とみられるが、それでも、これらの作用をひき起した対象としての刺戟そのものが意味されているとみられる

場合も生じてくるからである。

causal efficacy の語も、目次をみれば判るように、本論の基本概念の一つであるが、その意味を一語で誤解なく語ることは難しい。本訳稿では原語を留めておく。

organism の語は有機体と訳したいところであるが、有機体は通例生物とみられがちであることを恐れて組成体としておく。ホワイトヘッドによれば、一箇の石もまた多くの分子によって鞏固に組成されている organism なのである。

### 「三、方法論について

實際上シンボリズムがひろく関りをもつのは、経験内の一段と原初的な諸要素をあらわすためのシンボルとして純然たる sense-perceptions を用いるような場合である。それゆえ、多少とも重要な sense-perceptions は高度組成体の特性であるからには、私はシンボリズムに関するこの研究を主として人間生活に及ぼすシンボリズムの影響という点に限ることとしよう。低度の特性を研究するには、まず問題の特性を、これがより発達した種類の機能によって不鮮明になることなく、ふさわしい低度に留まっている組成体と関連させるのがよい。これは一般的原則である。逆に、高度の特性の研究には、まず、これがはじめて完全態をみせるようになった組成体と関連を持たねばならない。勿論、ある特性の全貌を明かにするために次善の策としては高度特性の胚芽段階を知りたくなるし、また低度特性がどのようにして高次の機能に仕えているかを知りたくもなる。

十九世紀は歴史的方法の力を過大視して、あらゆる特性は当然その胚芽状態をとらえて研究すべきものと考えた。かくて、例えば「愛」を究めるために野蛮人のなかへ、近來では白痴のなかへ赴く始末となつてしまった。

## 「四、シンボリズムの可謬性

シンボリズムと直接的知識とのあいだにはひとつの大きな差異がある。直接経験は無謬である。諸君の経験したことは、まちがいはなく、諸君の経験したことなのである。これに反し、シンボリズムはきわめて誤りやすい。すなわちシンボリズムは、実際にはこの世界に存在しない諸事物をわれわれに想定させて、しかも単なる観念にすぎないこれらの事物をめぐってさまざまな行動・感情・情動・信念などをかりたてる、という意味で誤謬を犯しやすい。さて、私がここに展開しようと思うのは、直接的知識の結果われわれが活動する仕方にはシンボリズムが不可欠の要因として介入する、という命題である。高度組成体の発展は、そのシンボリズムの諸作用が重要問題についてはつねに正しく働いている、という場合にのみ可能となる。だが人類の犯す誤謬もシンボリズムから同じく生じてくる。そして、人間性を支えている諸々のシンボルを理解し純化することこそ理性の任務にはかならない。

人間の心性を正しく語るにはつぎの三点を説明しなければならぬ。われわれは、(一)なぜ正しく知ることができるのか、(二)なぜ誤ることができるのか、(三)なぜ真理と誤謬とを批判して区別することができるのか。これらの説明を行うには心的機能を二種類に区別する必要がある。一つは事物を直接に知ることを本性とする機能であり、他の一つは、これを信頼する根拠としては、これが前種の機能の提供した一定の判定基準に適合しているという理由があるにすぎない類いの機能である。

第一種の機能は direct recognition (直接認知)、第二種の機能は symbolic reference (象徴類推) と呼ぶのがいいと私は主張する。また私が例解に努めようと思うのは、人間のすべてのシンボリズムは、いかに浅薄にみえるものでも、結局はこの根本的な symbolic reference の連鎖——direct recognition の二様態が交互に把えた知覚対象を最後に結び合わせる連鎖——に還元することができる、という理論である。「

真理を知り、誤謬を犯し、かつ真理・誤謬の弁別をなしうること——これらが人間心性の基本条件と見定められた。この誤謬の根拠をさぐって人間の心的機能が二分された。一つは誤謬を知らぬ、知覚の direct recognition であり、他は direct recognition の結果を前提として行われる symbolic reference である。末尾原文の一部は trains which finally connect percepts in alternative modes of direct recognition とあるが、右のように訳した。以下の論述をみれば、知覚の direct recognition には二つの様態があるとするのがホワイトヘッドの洞察である。同一対象がこれら二様態によって交互に把え直され、同一対象の二局面を知覚主体が統合してゆく。その作用、すなわち二局面の統一化あるいは関連づけが symbolic reference と定義された。この概念も原語を留めておく。

第二節で二分された一方、すなわち、客体的現象としての多種多様なシンボリズムが、すべて、知覚主体内部で行われるこの symbolic reference に起因する、とみて主客分裂の再統合をはかるのがホワイトヘッドの根本思想と思われる。

### 「五、シンボリズムの定義

以上の予備説明について、シンボルの形式的定義からはじめねばならない——

心的経験の構成因子のいくつかが、ほかの諸々の構成因子に関して、意識・信念・情動・使用法などをひきたすとき、人間の心は象徴的に機能している。この場合、構成因子の前者の一群は「シンボル」となり、後者の一群はそれらシンボルの「意味」(meaning)を構成する。その際、シンボルから意味への移行を行う有機的な作用が symbolic reference と呼ばれてゐる。

この symbolic reference は知覚主体 (percept) の本性が能動的にはたらいて寄与してゆく総合的な要素であり、

シンボル・意味それぞれの性質の共通性に基づいた同一地盤を支えとしている。しかし、二性質間のこのような共通要素がそれ自体で *symbolic reference* をかならず起させるわけではなく、いずれがシンボルいずれが意味となるべきかを定めるものでもなく、また知覚主体に *symbolic reference* による誤謬・災厄を免れさせる保証となるものでもない。われわれは知覚を、現に存在している事物が一箇の場合 (*an occasion*) を自ら創りだす際、原初的局相において把えなければならぬ。

〔知覚ノ行ワレル〕 何らかの原初的局相から〔知覚主体〕自身の産出行為が生ずるといふこの考え方を擁護するために、諸君は、このことを離れては道徳的責任もありえないことを思い起していただきたい。壺の形に責任をとるのは壺ではなくて陶工である。現に在る一箇の場合 (*an actual occasion*) というものは、ひとつの現実的な脈絡のうち、さまざまの知覚や感情や意図、ならびに初発的知覚から生ずる他のさまざまな活動 (*activities*) などをもち込むことによって生起する。ここで *activity* (活動) とは *self-production* (知覚主体自身の産出行為) の別名である。〕

人間に限られず、何らかの实在物が知覚の主体として「場合」を自ら創りだすことを述べている部分の原文を掲げる。

We must conceive perception in the light of a primary phase in the self-production of an occasion of actual existence.

In defence of this notion of self-production arising out of some primary given phase,.....

客体としての外界は現に実在している主体の活動によって一箇の「場合」として成立してくる、とホワイトヘッドは考える。かれの言わんとすることは陶土と壺の比喻によってやや分明となるが、その真意は八節以降の論述を俟た



ねばなるまい。ともかく、この主体の活動を自己創出と呼び、その初発点に知覚作用をおき、しかもこの初発的な知覚作用のうちに *symbolic reference* を定位しようとするのがかれの意図であらう。

「六、活動としての経験

このようにわれわれは、知覚主体が己れの経験を創りだす際に、知覚主体にひとつの活動を認めた。しかし、経験におけるこの「活動トイウ」契機は、経験の本性が前記の一箇の場合 (*that one occasion*) であるからには、まさに知覚主体そのものにほかならない。それゆえ少くとも知覚主体にとって、知覚とは己れと知覚される事物との内的関係である。

つきつめると、*symbolic reference* を行う知覚にふくまれている全活動は必ず知覚主体に還元されてゆく。このような *symbolic reference* の存立に必要なのは、まず、「一」シンボル・意味の双方が共有しており、しかも、知覚行為を完了した知覚主体とは無関係に表現できるもの。ついで、「二」特定のシンボルやその意味に頼ることなく考察することのできる、知覚主体の一定活動である。シンボルとその意味とをそれら自体に即してみれば、両者のあいだに *symbolic reference* があらねばならぬということも、またシンボル・意味一対の両項間に行われる *symbolic reference* が必ず一方の向きをもたねばならぬということも、いずれも必要でない。両項関係の性格はそれ自体で一方がシンボル、他方が意味と決定するわけではない。経験の構成因子でいつもシンボル、いつも意味になるようなものはない。ただ、比較すればより高次の構成因子がシンボルとなって、より原始的な構成因子が意味になるのが通例よくみられる *symbolic reference* であるにすぎない。

この所説はひとつの徹底した実在論の基礎となる。これに従えば、経験の要素のうち、ただ意味されるだけで、直接

知覚を拒むヴェイルの背後にある、というような神秘的要素は一切無用となる。この所説の宣明する原理は、symbolic reference は一箇の複合経験の構成因子二つのあいだに成立するが、それら因子の各々は本質的に直接認知されうるものである、というものである。このような意識的分析的な〔直接〕認知の欠ける場合があるとすれば、それは知覚主体が比較的低度にあつてその心性の欠陥から過失が生じたのである。」

ホワイテヘッドはすべてを知覚にはじまるとみる。そして、主体は知覚によってみずからその客体を創りだしてゆくとみる以上、主体—客体の関係は知覚主体内の内的関係とならう。その場合、symbolic reference の独自性を保証するものはなにか。訳者が「一」「二」と挿入した見出しの部分にこの問題が触れられている。「一」は客体の側にあつてシンボルとその意味とがすでに基本的なものを共有しているのであるが、これら両項を明白に結びつけるのが主体の側における symbolic reference という独自の作用であること、「二」は主体の側で客体に関りなく symbolic reference を要請する根拠が生じてくること、を述べていると私は解釈した。「一」についての具体的例解は次節で行われることになる。

ホワイテヘッドは本節において、徹底した実在論者であることをみずから宣明した。留意しておくべきであろう。

### 「七、言語

シンボルと意味が転換することを例示するために言語と言語によって意味された事物とを考えてみよう。語はシンボルである。そして語は書くこともできれば話すこともできる。さて時には書かれた一語がこれに対応する話された語を指して、音声を発してはじめて意味の判ることもあろう。

このような事例では、書かれた語がシンボルであり、その意味は話された語である。この話された語はさらに一つのシンボルであり、その意味はこの語——話されたにせよ書かれたにせよ——の辞書上の意味ということになる。

だが書かれた語は、しばしば、話された言語の介入なしにその目的を達している。したがってこの場合には、書かれた語が直接に辞書上の意味を象徴する。しかし人間の経験はきわめて変化に富み複雑であるゆえに、一般にはこうした事例も、ここに挙げたように明瞭な仕方では生起するわけではない。書かれた語はしばしば話された語とその意味とをともに示すが、この場合には、語を音声化して当の意味への関連づけをつけ加えることによつて、その *symbolic reference* はより明確になる。同じように、話された語が、これを書き記して視覚的に把え直すことを要する場合もある。

さらに、「樹」という語が——話すと書くとにかかわらず——われわれにとつて樹々のシンボルであると言えるのはなぜか。「樹」という語も、樹々そのものも、双方とも実は対等の条件でわれわれの経験に入ってくる。この問題を抽象的に観察すれば、樹々が「樹」という語を象徴するとみても、逆に、「樹」という語が樹々を象徴するとみても、いずれも正しいのである。

このことはたしかに真であり、人間の本性もときにこのように作用する。例えば、諸君が詩人であり、樹々について抒情詩一篇を書きたいと願っているとすれば、樹々が適わしい語を思いつかせてくれもしようと考へて森を歩くこともあろう。このように作詩という陶醉——あるいは苦吟——の境地にある詩人にとっては、樹々はシンボルであり、語は意味なのである。このとき詩人は語を得ようとして樹々に思いを凝らしている。

だが、詩に敬意をはらつて読むとしても、われわれの多くは詩人ではない。そのわれわれにとつては語がシンボルとなつて、森に行く詩人の陶醉を把えさせてくれることになる。詩人とは、目に見える風物、音のひびき、情緒体験

などが象徴的に言葉へと結ばれてゆくような人である。そして詩の読者とは、詩人の言葉が象徴的にはたらいて、詩人が喚起したいと願った光景や、音のひびき、情緒などを味わう人々である。このように、同じひとつの言葉でありながら、言葉の使用には、一方は話し手の側において事物から語へと向い、他方では聞き手の側で語から事物へと向う、二重の *symbolic reference* がある。

人間の経験という行為のうちに *symbolic reference* があるとき、そこにはまず第一に、相互に何らかの客観的関係で結ばれた二組の構成因子があって、その関係は事例が異なるにつれて干差万別である。第二に、知覚主体の構造全体が、二組のいずれかをシンボル、他方を意味として、両項のあいだに *symbolic reference* を遂行しているはずである。第三に、二組の構成因子のうち、いずれをシンボル、いずれを意味、と決めるのも、経験という行為がそのときにみせる「知覚主体ノ」特定の構造にはかならない。」

意味とシンボルの相互転換を語っている節であるが、具体的事例は順次容易に思いつくことができよう。

第一の事例にはランプの "A" とその音声 *gə* が適切であろう。シンボル "A" の意味は音声 *gə* が指しており、この音をさらに一つのシンボルとみれば、その意味は辞書を引くことよって明かとなる。

第二の事例にはわれわれにとつては遍在する漢字、例えば「犬」その他はみなこの例として数えられよう。

第三の事例には書かれた語「生地」を挙げてみよう、これを「キヂ」と発声するか、「セイチ」と発声するかによってその意味は判明する。

第四の事例には「セイチ」を記しておこう。これを「生地」と書くか「聖地」と書くかによってその意味は判明する。

ついで「樹」という語と樹々との関係をやや詳しく語ったホワイトヘッドは *symbolic reference* 生起の条件を三項目に挙示した。その内実はすでに、前節で指摘されていたものにはかならない。したがって本節は前節中間部の言説を具体的に例解したにすぎない。

#### 「八、Presentational Immediacy

いま詩人とかれが詩をひき出そうとする状況とを論じてきたが、そこにもっとも根源的なシンボリズムはすでに現れていたのである。すなわち語から事物への類推の一例を挙げてみたが、実は語と事物のこのような一般的关系はより普遍的事実の一特例にすぎない。外界に向うわれわれの知覚はその内容からみて二種類に分たれる。第一の種類はわれわれのおかれている世界を親しく直接に呈示することである。このことは、直接的な諸感覚を、これらこそ己れを包む同時世界の物理的実在物の性質であるともみずから決定して、われわれが「客体ニ」投射することによって行われる。この種類の知覚は、われわれを囲む直接的世界を経験することである。その際の世界はさまざまな感覚所与 (*sense-data*) によって装われている。そして感覚所与は、われわれ自身の肉体が世界と触れる瞬間にその触れ合いをなす肉体諸部分の状態に依存する。生理学はこの事情を決定的に確証しているが、その詳細を述べることは当面の哲學的論議に不要であり、問題を紛糾させるだけであろう。「*sense-datum*」の語は現代の術語であつて、ヒュームは「*impression*」(印象・刻印)の語を用いていた。

人間にとってこの第一種の経験は生々としており、また自分のおかれているその時の世界内部の空間的諸領域・空間的諸関係を示してくれる点でもきわだっている。

私の用いた「*projection of our sensations*」(われわれの諸感覚を投射して客体化する)という周知の語句はきわめて誤

解を招きやすい。生まの感覚がまず経験されて、のちにこれが足の感情として足に「投射」されたり、向いの壁にその色として「投射」されたりするのではない。この投射作用は経験の成りたつ状況全体の構成に不可欠の要素として、感覚所与と同じく始源的なものである。壁に投射が行われてそこにこれこれの色が認められたと語ることは、正確な表現ではあるのだが、誤解をも招きやすい。また「壁」というような語を用いることも、この語が別の一つの知覚様態から象徴的にひき出された情報を示唆してしまふので、やはり誤解を生みやすい。このいわゆる「壁」なるものは、これが presentational immediacy という「知覚ノ」純粹様態の前にさらされつつわれわれの経験の一助として自らを寄与する (contributes itself) ときには、ただ空間的遠近や感覚所与——この場合は色——と結びついた空間的な拮がりという外観をとるだけなのである。

私は、壁がこれら普遍的諸特性「遠近・色・延長ナド」を結び合せて寄与する、と述べる代りに、上記の外観のもとに「自らを寄与する」(contributes itself) という表現を選ぶ。なぜなら、われわれ自身をも内含する同一共通世界のなかで、それら諸特性が一箇の事物を露呈してゆくとき、「ソノ一箇ノ事物ヲ通ジテ」はじめて諸特性自体も相互に結ばれてゆくからであり、このときその一箇の事物を私は「壁」と呼ぶのである。われわれの知覚するのは普遍的特性にかぎられない。物からはなれた色、物からはなれた拮がりをわれわれは知覚しない。われわれの知覚するのはその壁の色であり拮がりである。経験される事實は「われわれから距った壁の上の色」である。このように色や空間的遠近は抽象的要素でありながら、問題の壁がわれわれの経験内に具体的に入りこむ仕方を特性つけてゆく。それゆえ、それら抽象的諸要素は「知覚ノ行ワレル」「その瞬間の知覚主体」と、「その瞬間の壁」と呼ばれる「知覚主体ト」同じように現実的な実在物 (entity)——あるいは一連の諸実在物——とのあいだを結びつける要素である。単なる色とか単なる空間的遠近などはきわめて抽象的な実在物にすぎない。なぜなら、これらのものは「知覚ノ」瞬間の

壁とその瞬間の知覚主体とのあいだを結ぶ具体的関係を捨象してはじめて得られるものだからである。この場合の具体的関係は壁にとっては大切でなくとも、知覚主体にとってはきわめて本質的な物理的事実である。「具体的関係ノウチ」空間的關係は壁にも知覚主体にもひとしく本質的であるが、色にかかわる側面は、知覚主体を成立させる部分ではあるが、その瞬間の壁にとってはどうでもよいものである。このような意味で同時空間内の諸事象は、相互に空間的關係を保ちつつ、それぞれ独立に生起している。私はこの種類の経験を「presentational immediacy」と呼ぶ。この用語は、同時空間内に生起する諸事象が相互に関連を保ちつつ、しかもいかにして相互に独立をも保っているかを表現している。このようにそれぞれ独立を保ちつつ関連し合っているということこそ同時性「同時ニ在ルコト」なるものの独自の特質である。この presentational immediacy は高度組成体においてはじめて重要となるもので、意識に入る入らぬは問わず、一箇の物理的事実である。意識に入る入らぬは注意力および概念化の作用の有無にかかっており、この概念化作用が起れば肉体的経験と概念を構成する想像力とが融合して知識が生ずるのである。」

知覚の種類を二分して、その第一種を規定した原文を掲げておく。Our perception of the external world is divided into two types of content: one type is the familiar immediate presentation of the contemporary world, by means of our projection of our immediate sensations, determining for us characteristics of contemporary physical entities.

知覚のこの第一種類の様態をホワイトヘッドは presentational immediacy と名づける。後段一二節の冒頭では、これが通例 sense-perception と呼ばれているものにほかならないが、ただ若干の制約と拡張を加えたと述べている。それゆゑ presentational immediacy の構造を詳しく抱えるには一二節を俟たねばならないが、本節の叙述から

はつぎのように言えるであらう。

知覚主体が例えば赤い色を知覚したとする。ところが知覚対象となった「赤」色は物をはなれて存在するのではなく、実は知覚主体と同じく actual な実在物 (entity) が「赤」色その他の諸特性（空間的遠近や延長など）を露呈させつつ、知覚主体の前に現前してきているのである。ホワイトヘッドがこのような実在物の存在を主張する実在論の立場をとることについては六節に明言があった。またこのように現前した実在物を何とみるか何と呼ぶかは後の問題である。さて、ホワイトヘッドはこの actual な実在物のみずから行う現前作用を強調して *contributes itself* の語までも用いていた。混沌のなかで一箇の実在物たる知覚主体がその知覚作用によって現前してきた他の実在物と結ばれるとき、客体となったその実在物はみずから諸特性を知覚主体に把えさせてゆき、この主体—客体の厳然たる関係を前提として混沌は秩序へと変ってゆくとみるのであらう。presentational immediacy とは、知覚主体がおのれの前に現前してきた実在物の諸特性を直接に知覚することを語ろうとした術語である。対象に即してみれば、知覚の対象が直接に現前して在ることを指すが、訳語は意を伝えかねるであらう。原語を留めておく。

最後に注目すべきは、この presentational immediacy が大切な性格をもつのは高度の組成体においてである、とホワイトヘッドが述べていることである。この点については今後明かにされてゆくであらう。

### 「九、知覚的経験

「経験」(experience) とは哲学においてもっとも人を欺きやすい語の一つである。これを十分に論じるとすれば、それだけで一著作の主題とならう。経験を分析するにあたって、ここでは当面の思索に関連する要素を示すだけである。

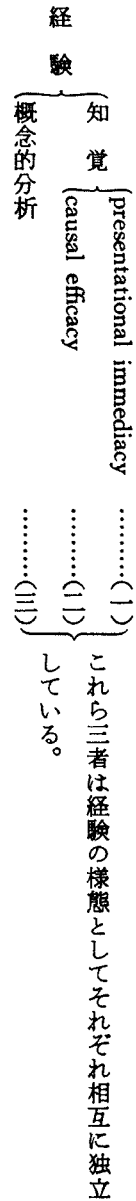


われわれの経験は、これが主として、われわれが現実的であると言われるのと同じ意味で現実的であるような他の諸事物の鞏固な世界の直接認知に関わってゆくかぎりでは、三つの主要な独立的様態をもっている。そしてそれらの各々は、人間的経験の具体的な一瞬 (one concrete moment of human experience) のなかにわれわれが個人的に入りこむ際に、それぞれの構成因子をさしだして〔個人的経験ニ〕寄与するのである。私は経験のこれら三様態のうち、二つを知覚的 (perceptive) と呼び、第三のものを概念的分析の様態 (the mode of conceptual analysis) と呼ぶ。純粹な知覚に関しては、その二種類の一つを 'presentational immediacy' の様態、他を 'causal efficacy' の様態と呼ぶ。人間経験のなかへは 'presentational immediacy' と 'causal efficacy' の双方が諸々の構成因子をもち込むのであるが、これらの構成因子をさらに分析してゆけば、一方では現実世界の現実的事物に行きつき、他方では諸々の抽象的な屬性・特質・関係などへと行きつく。この後者の一群は、どうして前者の現実的事物が個人的経験にその構成因子として寄与してゆくのか、その仕方を教えてくれるものである。くり返せば、後者のごとき抽象的諸要素は、前者のごとき現実的諸要素がわれわれにとって「経験」構成の成分たる諸客体 (component objects) となる仕方を示してくれる。それゆえ私は、それら抽象的諸要素はわれわれのためにわれわれの「環境」 ('environment') 内の現実的事物を「客体化」 ('objectivity') する、と言いたい。

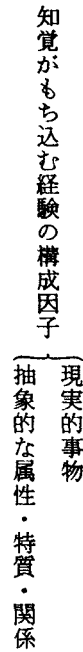
われわれにもっとも直接的な環境は身体のごまざまな器官が構成する。これよりややはなれた環境とは近辺の物理的世界である。とにかく「環境」という語は、個人的経験の構成要素を形成するという重要な仕方で「客体化」されてゆくところの、「知覚主体以外」の現実的な諸事物を意味する。」

経験に関する本節の略述を二つの表にまとめておこう。

〔第一表〕



〔第二表〕



右の第二表における現実的事物と抽象的諸特性とが相互にいかに関り合うか、については前節にも記述された。ただ知覚の二様態がそれぞれに把える対象が、一方は現実的諸要素、他方は抽象的諸要素というように限定されるか否か、についてはこれまでの記述では判明しない。おそらく *presentational immediacy* の様態、*causal efficacy* の様態の双方とも、二分された客体側のいずれにも関与するのであろう。とすれば、知覚主体の側で二分された知覚様態と、知覚の対象として二分された客体とをどのように関連させて、厳然たる主体—客体関係の上に經驗の統合的性質を確保するか、が今後の問題となるであろう。

「一〇、知覚的經驗における *symbolic reference*

二つの判明な知覚様態のうち、一つは *presentational immediacy* というあり方を見ぬいて現実的事物を「客体化」する。もう一つは——私はまだこれを論じていないが——*causal efficacy* というあり方を見ぬいて現実的事物を「客

体化」する。この二様態を融合して一つの知覚を生みだす綜合活動が私の言う symbolic reference である。この symbolic reference がはたらいて、知覚の二様態がそれぞれに明かにした種々の現実は同一性を保つものとなる。あるいは少くとも、われわれの環境においては内的関連をもつものとして、相互に関連づけられる。こうして symbolic reference の結果がわれわれの見る現実世界となる。この現実世界とは、われわれの経験において、諸々の感情・情動・満足・行動を生みだしうる所与としての世界であり、また、われわれの心性がその概念的 analysis を携えて介入してくると、最後には意識的認知の主題となるはずの世界である。「直接的認知」(direct recognition)とは、知覚のいずれか一方の様態において、symbolic reference を行うことなく知覚の対象を意識的に把握することである。

symbolic reference は多くの点で誤謬を犯しやすい。私がこのように述べるとき、その意味は、ある「直接的認知」が把握した現実世界の情報と、symbolic reference の融合作用の所産を意識的に把握したものとをつき合せると、そこには不一致がみられる、ということである。このように誤謬とは第一義的に symbolic reference の所産であり、概念的 analysis の所産ではない。また symbolic reference は概念的 analysis によって大いに促進されるが、それ自体は第一義的には概念的 analysis の所産ではない。なぜなら symbolic reference は「概念ヲ用イル」心的 analysis が後退しているときでも、なお、経験を支配しているからである。水面に映る肉片を取ろうとして、口にくわえた肉を落したインソップの犬の寓話は誰でも知っている。けれども、われわれは誤謬をあまりきびしく糾弾してはならない。精神発達の初段階では、symbolic reference に生ずる誤謬は想像の自由を高める試練なのである。インソップの犬は肉を失った。だがこの犬は自由な想像へ向う道の第一歩を進めたのだ。

このように symbolic reference は概念的 analysis に先んじて説明されなければならない。もっとも両者には相互に促進し合うつよい作用があるのだが。

symbolic referenceの本質が本節で明言された。これは知覚の二様態を結びとうとする統合作用にほかならない。対象に向って知覚はこれを(一) presentational immediacyの様態で把える場合、(二) causal efficacyの様態で把える場合、(三)両様態において把える場合、という三つの場合がある。(一)(二)は direct recognitionの場合であって、ここに誤謬は生じない。(三)の場合に symbolic referenceが発動して二様態を一つの知覚に統合しようとするが、このとき誤謬も生ずる、とみるのである。ホワイトヘッドによれば、誤謬の根拠を挙げることは人間心性の特質を語る際の必要条件であった(第四節)。いまかれは、誤謬の根拠は第一義的には思考にあるのではなく、むしろ知覚の根源的作用の一つにあることを明言した。そしてこの誤謬の根拠が実に想像力の自由をも与えていることを強調するのである。注目すべき思想であらう。

### 「一一、心的と身体的

判りやすくするために、symbolic referenceを暗黙のうちに心的活動に帰してその詳しい説明をさけることもできよう。だが、われわれの経験というさまざまな活動のなかで、どれを心的、どれを身体的と呼ぶかは便宜上の区別にすぎないのである。私は個人的には心性(mentality)なるものを、知覚対象のほか概念をもふくむような種類の活動にかぎりたいと思う。しかしわれわれの知覚の多くは、知覚と同時に起る概念的分析から生じてくるきわめて微妙なものに基づいている。したがって実際には、経験における身体的構成と心的構成とを分ける適当な境界線は存在しない。他方意識的知識には、概念的分析という形式をとって介入してくる心性と無縁なものはない。

のちに概念的分析について少々触れることは必要となろうが、さしあたって私は、これが意識を要し、また経験の一部を分析するものであることを仮定するだけにしておいて、純粹な知覚の二様態へ戻らねばならない。私がおこで

主張したい論点は、低度の純然たる物理的（身体的）組成体が不可謬であることの理由は、第一義的には、これに思考が欠けているからではなく symbolic reference が欠けているからだ、ということである。イソップの犬は貧しい思考の持主であったとはいえず、presentational immediacy から causal efficacy への誤れる symbolic reference を行って誤謬を犯した。手短かに言えば、真理と誤謬とがこの世界に共存するのは綜合作用 (synthesis) があるからである。しかも現実的実在はすべて綜合的なものであり、現実的なものがその与えられた局面から「知覚主体ニ向ッテ」己れの姿を上昇させる際、これを把える「知覚主体」綜合的活動のひとつの原初的形式が symbolic reference である。」

心身二元に関する論議は古来の、とくにデカルト以降の近代哲学の最大の論点であった。近年の哲学的人間観はこの対立を否定する傾向をもつよく見せていると思われるが、ここにみられるようにホワイトヘッドも心身対立を否定する立場をとっている。

「二二」 presentational immediacy における感覚所与センス・オブ・グーツと空間との役割

‘presentational immediacy’の語で、私は通例、‘sense-perception’（感覚知覚）と呼ばれるものを意味している。だが sense-perception の通常用法にはみられない若干の制約・拡張を加えて前語を用いている。

presentational immediacy とは、われわれ自身の経験の一要素として「経験ノ瞬間ニ」現れている同時的な外部世界を、直接に知覚することである。このような現れをみせるとき、世界は現実的な——われわれが現実的であると云われるのと同じ意味において現実的な——諸事物から成る一共同体として己れを呈示する。

世界のこのような出現は色・音・味などの質を媒介に行われる。そして、これらの質はわれわれの感覚である

と記しても、逆に、われわれの知覚する現実的事物の特性であると記しても、いずれもひとしく正しいと言える。それほどにこれらの質は、知覚主体と知覚される事物とのあいだで、相関的 (relational) に存在するのである。したがってこれらの質をそれらだけに遊離させようとすれば、知覚される諸事物同士が相互に保っている空間的關係と、これら諸事物と知覚主体とが結ばれている空間的關係とのなから抽象してとり出さなければならぬ。空間的な拡がりをもったこの関係性は、知覚主体、知覚された諸事物のいずれかに偏ることなく、いずれをも完全に納めきった一箇の全体像である。それは「経験成立ノ瞬間ノ」同時世界という共同体を形成している複雑な諸組成体の、形態的な図像である。現実の物體的組成体が一つ一つ、同時存立の諸物から成る世界に加わる時にも、各々はその全体的図像に合致してゆかねばならない。こうして色などの感覚所与、あるいは肉体の諸感情は、この空間的全体像が許す視界のなかで、われわれの経験に物理的な、延長をもつ諸実在物をもたらしめてくれるわけである。空間的關係そのものは類的抽象 (generic abstraction) であり、感覚所与も類的抽象である。だが空間的關係が整える感覚所与の遠近的配置は種的關係 (specific relation) であって、外界の事物はこの種的關係によって、またその度合に応じてわれわれの経験の一部となる。このような具合に「客体」として経験のなかへ導入される同時的組成体には、われわれのさまざまな身体器管も含まれており、それゆえ感覚所与は身体感覚 (bodily feelings) と呼ばれるのである。身体の諸器管と、われわれの知覚のこの種の様態に重要な寄与をなす類いの外的諸事物とが相俟って、知覚を行う組成体の同時環境を形成している。すなわち、presentational immediacy に関する主要な事実はずきのとおりである。一、問題となる感覚所与は、知覚を行う組成体と、これが知覚の対象たる組成体に対して保持する空間的關係とに依存する。二、「知覚成立ノ」同時世界は拡がりをもち、そこには諸組成体が充満しているものとして呈示される。三、presentational immediacy は少数の高度組成体の経験においてのみ重要な因子となるもので、それ以外の組成体にあつては未発達

の、あるいは全く無視してよい状態にしかない。

このように *presentational immediacy* による同時世界の開示は、現実的諸事物が〔前述ノヨウニ〕偏りをまたぬ空間的な拡がりのうちに納められているゆえに、必ずこれら諸事物の連帯をも開示することになる。さらに、純然たる *presentational immediacy* がなし出す知識は生々として正確であり、また不毛である。またこの知覚様態は、かなりの程度、意志によって統御もできる。すなわち、ある瞬間の経験は、禁止とか強化とかその他の修正をほどこすことによって、次後につづく経験の *presentational immediacy* の性格を予めかなりの程度決定しうるのである。この知覚様態は全くそれだけでみると不毛である。なぜなら、これは他の事物の提示している質を、当面の対象たる事物の内在的特性と直ちには結びつけもしないからである。鏡に映った色つきの椅子を眺めると、この映像は鏡面背後の空間をわれわれに示している。だがその際、鏡面背後の空間の内在的特性に関してわれわれは何の知識も得はしない。けれども色の直接的な呈示という点では、良い鏡に映った映像の、鏡面背後に一定距離をおいた世界を質化している色は、ふり返って現実の椅子を直接に見た場合と変りはないのである。純然たる *presentational immediacy* は錯覚・非錯覚の区別を拒む。それは、本来は空間関係を保持している外部の同時世界を直接に呈示するものとして、現出したものをすべて受けいれるか、あるいはすべてを拒むしかない。さて、*presentational immediacy* に扱えられた感覚所与は、その場合の同時諸事物が表現しうる関係よりも、はるかに広い関係をこの世界内で保持している。このはるかに広い関係を捨象してしまうと、同時に存立する諸客体を感覚所与によって外見から特性づけ質化してゆくことの意義を決める手段がなくなる。それゆえに、*mere appearance*（単なる見せかけ）という語句は不毛を響かせている。感覚所与の保持するはるかに広い関係は、知覚のもう一つの様態、*causal efficacy* を検討することによってはじめて理解可能になる。だが同時に存立する諸事物を結び合わせるのが、ただ *presentational immediacy* だけ

であるとすれば、これら諸事物は、その知覚の瞬間の空間的諸關係をのぞいては、相互に全く独立して生起する。また大部分の事象 (events) にとっては、それらが己れの内部にも *presentational immediacy* の經驗は無視してよいほどに未発達であると思われる。この知覚様態はきわめて少数の精妙な組成体にとってのみ重要であるにすぎない。」

本節の構成は知覚作用の生じたばあいの空間關係を扱っている前半と、この空間關係を捨象して感覺所与を独立的に考察している後半とに分たれる。いずれの部分においても力説されるのは、*presentational immediacy* という知覚の様態が高度組成体の特質である、という点である。

後半部分は具体例に即しての記述であるから誤解も生じないことであろう。

前半の記述はホワイトヘッド自身が三項目に要約している。これらをあらためて約言すればつぎの通りである。

- 一、感覺所与は知覚主体と知覚対象との空間關係に依存している。
- 二、知覚成立のとき世界は諸々の組成体の充滿した空間として現出する。
- 三、*presentational immediacy* は高度組成体の特性である。

これら三項目のうち問題となるのは一、二兩項の内容であろう。批判は後のこととして、まずは理解するために具体例をとってホワイトヘッドの叙述に沿ってみよう。

いま私が *presentational immediacy* の様態をとって「赤」色を知覚したとする。このとき、この「赤」色は知覚主体たる私と、知覚対象たる事物（例えば「バラ」と名づけられるものかもしれない。ホワイトヘッドはかかる事物を實在物 *entity* として容認する。ただ、「赤」色を見ただけの知覚主体には、まだそれが何であるかは全く知られない。causal efficacy の様態と概念的分析和を度外視しているからである。）とのあいだに、いずれにも相關的に関り合うものとして存在する。この關係



を捨象すると「赤」色も実は失せるのである。「赤」色と私との関係が断ち切れてしまうと、この「赤」色が己れをとりまく諸事物・諸性質とのあいだに保っていた諸関係も失せてしまうからである。「単なる見せかけ」(Here appearance) という語がいかにも不毛を指摘した言葉として用いられるのも、根源的にはこの点に触れているからであらう。知覚成立とともに本来はまさに有機的な全体的関係がみえてこなければならぬはずなのであるから。またこの意味で知覚が事物を存立せしめる。私が「赤」色を知覚したとき、この「赤」色を通じてはじめて世界は現出してくるのである。ところで知覚によって「赤」色と私とが一旦結ばれたときには、この関係が一箇の全体的な空間を存立させる、とホワイトヘッドは言う。すなわち、「赤」色と私とを両項とする関係と、「赤」色と諸事物・諸性質との関係とから成立つ一空間である。この空間の全体的図像を把握するのがおそらく causal efficacy という状態にほかならぬことになるのであらう。そして、この空間内に存在するようになった一切の事物は、その全体的図像にいささかの破綻も生じさせることなく、それぞれの位置を保っていなければならないはずであり、また事実そのような在り方をとっているのである。さて、私はまず「赤」色だけを知覚したのであった。この「赤」色と私との始源的な関係をホワイトヘッドは種的關係(specific relation)と名づける。世界は知覚主体が何らかの感覚所与とのあいだにこの種的關係をうち立てることによって瞬時に現出してくるわけである。一点の凝視が世界を創りだす。ここに成立した破綻なき世界は前記二種類の関係から成る空間であり、この空間関係は、さきほど「赤」色を中心に考えてみたように、抽象的に構想することができる、とみてよい。このことをホワイトヘッドは類的抽象(Generic abstraction)と名づけている。また、この空間内に充滿しているはずの諸々の感覚所与も、われわれが同じように類的抽象を以てすればそれらの現存を想定しうるものということにならう。いまかりに、あえてこのような空間世界の側から事態を見直したとすれば、この世界に充滿している諸々の感覚所与の一つが、同じくこの世界内に在る私と種的な関係をとり結

んだとき、この世界は瞬時に己れの全貌を露呈してくれる、ということになる。その際、種的關係によって結ばれた「赤」色は客体として私の経験のなかへ入りその一部になる、とホワイテヘッドは言う。この「客体化」の問題が次節の主題であり、第一章を締めくくっている。

知覚に関する生理学の究明がこのような見解をどのように扱うか、私は知らない。だが *presentational immediacy* という様態を前提として容認すれば、その後のホワイテヘッドの論旨とそこに示された理論的構成は理解不能なものではあるまい。ただ、くり返しておけば、知覚の二様態のうちこの *presentational immediacy*こそ高度組成体にかざられる特性である、とホワイテヘッドは力説する。この点にかれの主張の独自性がみられるであろう。

### 「一三、客体化

*presentational immediacy* に関するこの説明において、私は、現実的諸事物はわれわれの経験のなかに**客体**として (*objectively*) 在り、またそれら自体の完結性という点では**形式的**に、 (*formally*) 現存する、という区別を守ってきた。*presentational immediacy* とは、同時に存立する諸事物がわれわれの経験のなかに「客体として」存在する**独得の在り方**であること、また、このように「客体ヲ」導入する様態の諸因子を構成している諸々の**抽象的実体**のなかに、**通例感覚所与**と呼ばれている**抽象的要素**——例えば色・音・味・触感・身体感覚——があること、これが私の主張するところである。

このようにみると「客体化」それ自体が抽象である。なぜなら現実のいかなる事物もその「形式的」側面を完全に「客体化」させることはないからである。抽象とは自然の相互作用の様態を表しており、単に心的にすぎぬものではない。抽象を行うとき、思考はただ自然に適応しているにすぎない。いやむしろ、思考は己れを自然の一要素として

呈示する、と言えよう。総合と分析とは互に相手が必要とするのである。ところが、このように把える見方は、現実世界をそれぞれ私的な性質を具えた現実的ではあるが受動的にすぎぬ諸実体 (substances) の集合と見る人々の目には背理<sup>パラドクス</sup>となろう。この人々の見地に立てば、どうしてこの種の一箇の実体が他の一箇の実体を構成する際の構成因子になるのか、を問うことなどは意味をなすまい。そしてこの見地に立つかぎり、現実的実体の一つ一つを an event (事象)、a pattern (型)、an occasion (場合) などと呼び代えても、難問は解けない。この見地にとつての難問とは、個個の実体は現実的であるわけだが、諸実体のまとまりをこれと同じ意味で現実的に構成できるのはどうしてか、という問である。これに対して私の採った世界把握の見方は機能的活動 (functional activity) という概念である。その意味するところは、現実の事物はすべて己れの能動的活動を通じて何物かとして在ることになる、ということである。それゆえ、現実的事物の本性は己れが他の事物と関るときに生ずるのであり、またその個性性は己れ自身が己れにとつて関りある他の諸事物を総合してゆくときに生ずるのである。一個体について検討を行う際には、いかなる場合でも、この個体自身の統一経験のなかに他の諸個体は「客体として」(objectively) いかに関りこまれてゐるか、を問わねばならぬ。己れ自身の経験を統一的にもつということが、一個体が「形式的に」(formally) 現存するということである。またわれわれは、一個体が他の諸事物の「形式的」存在のなかにいかに入り込んでゐるか、をも探らねばならぬ。このように他の諸事物に入り込むことが、一個体が「客体として」現存するということである。すなわち、その一個体のもつ形式的内容の一部の要素だけを挙示しつつ抽象的に現存する、ということである。

世界をこのように把握する見方をとつて、何らかの現実的個体、例えばひとりの人間について語るときには、かれをかれの経験の一箇の場合 (in one occasion) において把えなければならぬ。そのような一箇の場合あるいは行為というものは複合的である。したがつて、これをいくつかの局面と他の構成因子とに分析してゆくことができる。また

そのような一箇の場合こそはもつとも具体的にして現実的な実在物であり、誕生から死にいたる人の一生はそのような場合のいくつもから成る歴史的軌跡である。これらの「場合ヲ形成スル」具体的な諸瞬間は唯一の社会(One society)のなかへと統合されてゆく。それがなされるのは、まず瞬間の一つ一つがそれぞれ部分的には形式面での同一性を保っているからである。ついで、生涯の歴史の一瞬一瞬は己れの直前に先行する諸瞬間を、一つとして洩らすことなく、己れのうちへ取り込んで集大成してゆくからである。ある瞬間における人間は、己れの過去の色合を己れのうちに凝結させるとともに、その過去の結果ともなっている。「全生涯の歴史を通じてのその人」というものは「その一瞬におけるその人」に較べればひとつの抽象体である。それゆえ、特定の一人についての観念には三つの異なる意味がある。例えばジュリアス・シーザーを挙げてみよう。「シーザー」の語は「かれの現存していたときの、ある一箇の場合におけるシーザー」を意味しうる。これはすべての意味のなかでもつとも具体的な意味である。つぎに「シーザー」として生れシーザーとして暗殺されるまでの、シーザーの歴史的軌跡」を意味しうる。さらに「シーザーの生涯の一つ一つの場合に反覆されたところの、共通の形式あるいは型」をも意味しうる。これら三つの意味のいずれを選んでも誤りとはならない。だがひとたび選びとった以上は、その意味が生きる脈絡を逸れてはならないことになる。

持続性をもつ組成体の一生が描く歴史の本性について述べてきたが、この見解は、人間にも電子エレクトロンにも、およそ経験を一統一することのできた一切の組成体に妥当する。ただ人類は、その経験内容に関して、電子には拒まれている豊かさを獲得しているだけである。そして「一切あるいは無を」という原理を強いられるときには、いつでも、われわれは何らかの仕方で見実在の一箇の実在物を扱うことにして、このような諸実在物から成る社会や、このような一箇の実在物に寄与している構成因子の分析などを見捨ててしまわなければならない。

本講演で私は外部世界の直接経験に関する見解を述べてきた。この問題を十分に論じようとするれば、どうしても当

面の論題からはるかに逸脱してしまうことになる。そこで私はサンタヤナの近著『*Scepticism and Animal Faith*』の初めの部分を読むようにお奨めする。そこには私の採った仮定を否定してしまおうと全く不毛な『solipsism of the present moment』(この瞬間だけを信ずる唯我論)——すなわち全くの懐疑論——に落ち込むことが決定的に証明されている。ついで、これはサンタヤナの權威に頼ることはできないのだが、私の見解の第二の論点はつぎの通りである。すなわち、もし個体の経験に上記の直接性を一貫して認めてゆくとすれば、哲学的理論構成を行って世界を概念的に把握すると、世界は機能的活動の相互作用として把握される。しかも個々の具体的な個物は、この相互作用によって、少くとも世界が過去にすでに定着しているとみるかぎり、具体的な諸々の個物から成るこの定着せる世界に対して確然たる関係を保ちつつ、己れの姿をあらわしてくる、と私は主張するのである。」

本節でホワイトヘッドは世界の構成原理を「機能的活動」(functional activity)と呼ぶ概念で語っている。その意味するところは本文に「現実の事物はすべて己れの能動的活動を通じて何物かとして在ることになる」ことと規定され、その後の叙述にも明示されているから再説は行うまい。だが客体化および形式の問題も当然この基本原理と合致するように論じられてそれぞれの規定をうけることになる。それゆえ、これらの扱いにみられる独自性は理解しておかなければならないであろう。

本節冒頭部分の陳述はつぎのように要約できる。——

presentational immediacy という様態の知覚は感覚所与を把えてこれを経験のなかへ導入する。知覚主体の経験のなかへ現実的事物はこうして「客体として」とり込められ、その客体は同時に己れの「形式」をも確保することになる。この客体化それ自体は一つの抽象的作用にはかならない。——

この問題も具体例に即して理解しておこう。いま私が「赤」色を *presentational immediacy* の状態で知覚した。このとき「赤」色を現前させた現実的事物——例えばのちに「バラ」と名づけうるもの——は、その「赤」色を媒介として私の経験のなかに客体化されるわけである。しかもこの客体化を行うとき、私はその「赤」色を形態的に何らかのまとまりあるものとして（おそらくのちの *causal efficacy* という状態の知覚とともに）知覚するであろう。したがって「赤」色をもつもの——「バラ」——が客体化されるときには、これは必ず形式をもつことになる。ところが「赤」色を現前せしめた現実的事物——「バラ」——は、他の諸事物や諸性質と無数の関係で結ばれてその関係のうちに溶融しているために、それ自体としての全貌を知覚主体に呈示することは原理的に不可能である。あくまで *presentational immediacy* という状態に適う局面しか知覚主体には呈示しないのである。したがって客体化とは必然的に大多数の空間関係を捨象した抽象となる。

だがここで注意すべきはこの抽象を一方的に心的作用によるとみてはならないことである。一般に抽象や分析を行うとみられる思考が現実的実在物を対象として実際に抽象を行うとしても、その際思考は知覚の提供する感覚所与を媒介とするわけで、その感覚所与そのものが右に述べたようにすでに根源的に抽象なのである。知覚が総合的に (*presentational immediacy* と *causal efficacy* の両状態によって) 把えたもの、これを思考は分析する。このばあい総合と分析とは不即不離である。このような基本構造からみれば、思考がはたらいているということは、実は当の対象そのもの——世界の構成因子の一つ——が己れに順応させつつ思考を現出させたこと、と把えることもできるのである。

さて、このようなわずかばかりの解明によっても窺うことのできるのは、知覚作用の瞬間に、一切の現実的事物が能動的におのれを露呈して、これら一切をふくむ整然たる空間関係、その配置や秩序を現出させてくる世界、すなわち、まさに実在物の緊密な有機的結合の世界にはかならないであろう。この第一章においてすでにホワイトヘッドの

独自の世界像はよく知られるのである。

本節を結ぶにあたってホワイトヘッドはスペイン生れの哲学者 George Santayana (1863—1952) の権威に「機能的活動」という概念の支持を認めているが、私はまだこの思想家をよく読んではいない。

本節末尾は causal efficacy の概念を予示して第二章への移行をはかっている。シンボリズムの原理としての symbolic reference とは presentational immediacy と causal efficacy という知覚の両様態のあいだで行われるものであった。しかも、causal efficacy についてもホワイトヘッドは己れの把握の独自性を強調している。われわれも、はやく、この概念の理解へと赴かねばなるまい。

〔未完〕